様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月１５日現在

機関番号：28001
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21720034
研究課題名（和文）　カッシーラー哲学の形成と「空間」の問題

研究課題名（英文）　Formation of Cassirer's Philosophy and the Problem of "Space"

研究代表者
喜屋武　盛也（KIYATAKE MORIYA）
沖縄県立芸術大学・美術工芸学部・准教授
研究者番号：10345241

研究成果の概要（和文）：

本研究は、哲学者エルンスト・カッシーラーが『象徴形式の哲学』を著しそれを体系的に展開させる際に「空間」の問題が果たした役割に注目した。カッシーラーは、非ユークリッド幾何学や相対性理論を背景とする空間概念の新しい理解を手掛かりとして認識論を再構築し、さらに神話的思考や言語、芸術などの文化領域における空間の問題へと考察範囲を広げることで、認識論を多元主義的な文化哲学へと導いた。「空間」の問題は『象徴形式の哲学』に絶えず思考のための材料を提供したのである。

研究成果の概要（英文）：

This research project focuses on the role the problem of "space" played when the philosopher Ernst Cassirer wrote *The Philosophy of Symbolic Forms* and developed it systematically. Cassirer rebuilt epistemology with the help of a new treatment of the concept of space, which was brought about by non-Euclidean geometry and the theory of relativity. Furthermore, he led epistemology to a pluralistic philosophy of culture, by extending the scope of the inquiry to the problem of space in the cultural domain including mythical thought, language and art. The problem of "space" continually provides *The Philosophy of Symbolic Forms* with materials for thinking.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900000	270000	1170000
2010 年度	800000	240000	1040000
2011 年度	500000	150000	650000
年度			
年度			
総　計	2200000	660000	2860000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：哲学　美学・美術史
キーワード：カッシーラー、空間、象徴形式

１．研究開始当初の背景

エルンスト・カッシーラーについての研究が活況を呈するようになったのは、1980 年代の後半からである。『象徴形式と歴史』（Symbolic Form and History, 1987）の著者 J・M・クロイスはカッシーラーの多面多彩な業績に思想的な統一点を見いだすことに努め、以後の研究に指針を示した。以後今日に至るまでのあいだに、遺稿集やハンブルク版全集、そして研究叢書などの刊行物が出され、国際協会が組織されるなど、研究のための環境が着実に整えられてきた。そうしたなかで、カッシーラーの美学および芸術論に関する研究は、他の領域と比べるならば非常に遅れていた。主著『象徴形式の哲学』においてまとまった記述が残されなかったため、手掛かりを大きく欠いていたことがその理由の一つであると考えられる。しかし、そうした状況も、2000 年代に入ると M・ヒンシュや M・ラウシュケの研究により次第に埋められてゆく。その後、国際協会の大会テーマで芸術が扱われる（Kunst als Symbolische Form – Ernst Cassirers Ästhetische Theorie,2010）など、今後の研究の進展が期待される。

これまで研究代表者は、「〈均衡〉としての芸術―エルンスト・カッシーラーのハンブルク時代の芸術論―」(『美学』49(4), 1999)、「エルヴィン・パノフスキーと「新カント主義」」（『カリスタ』7, 2000）をはじめとする諸論文を通じて、カッシーラーの芸術論や同時代の動向との関係、さらに象徴形式の哲学における芸術の位置づけについて考察を加えてきた。本研究が構想されたのは、上述のような研究上の動向を踏まえて、芸術を象徴形式と見なすことによって『象徴形式の哲学』そのものの意味をよりよく理解できるような視座を獲得したいと考えたからである。

２．研究の目的

本研究は、カッシーラーが『象徴形式の哲学』を著しそれを体系的に展開させる際に「空間」の問題が果たした役割に注目した。というのも、時間、数と並んで、空間は象徴形式それぞれに独自に展開しながらも共通して見出される基本的概念であり、相互に比較参照をするうえで大きな手掛かりになるからである。また同時に、『象徴形式の哲学』が成立する過程において、近・現代科学における空間概念の新たな把握に触れて空間の問題に取り組んだことが、大きな要因になっていることが指摘できる。芸術の問題をカッシーラーの一貫した関心事である空間の問題と結び付け、空間の面から探ってゆくことは、象徴形式としての芸術の解明に大きく寄与することができると考えられる。

さらに、芸術における空間の特性を神話的思考における空間や科学的認識における空間の特性と比較検討することは、二十世紀前半の哲学動向の一事例として他の同時代の哲学者との比較研究へと、さらに文化哲学一般の論究へと展開する可能性を有していると言えよう。

本研究は、こうした意図をもって、1920 年代および 30 年代初頭のカッシーラーの著作や論考をたどり、美的空間および様式の問題がどのような過程を経て彼の中で焦点を結ぶに至るのかを考察する。

３．研究の方法

本研究は、主に次の二つの論点に注目して関係する文献を精査し、また、相互の関連や背景を探った。

（１）カッシーラーは『象徴形式の哲学』第 2 巻にて神話的空間の特性について述べているが、それを芸術的な問題へと適用したのは彼自身ではなくて、美術史家のパノフスキーであった。「遠近法」を象徴形式と見なすパノフスキーの立場とカッシーラーの『象徴形式の哲学』との関係についてはいまだ未整理であり、前者が後者から一方的に影響を受けたということが言われてきたが、実際には、カッシーラーがこの若い同僚の議論の展開をどのように受け止め、あるいは自分の議論に生かしていったのか、という問題は、今一度あらためて検討をしてみるべき問題である。1925 年以降のカッシーラーの論考を中心に記述を精査することで、こうした問題に回答を見いだすべく試みた。

（２）カッシーラーは、1930 年に美学芸術学国際会議で行われた講演「神話的、美的、理論的空間」（1931 年）において、象徴形式相互を比較しながら空間の問題を論じている。この講演は、本研究の問題設定そのものの足掛かりとなるものである。ここで展開された空間論は、『象徴形式の哲学』の成果を集約するとともに、晩年の芸術に関する論究を用意するものであるが、そこでは、さまざまな芸術形式における空間の問題に言及されるなかで、「様式」という概念が重要なものとして浮かび上がってくる。「様式」概念はどのような経緯で、注目されるに至ったのであろうか。のちに人文科学の基礎的な概念として規定される、「様式」について、こうした議論が登場するに至ったカッシーラーの問題設定を、30 年の講演以前に行われた議論の

中から探り、象徴形式の哲学との関連を再確認する。

なお、上記の二つの問題設定は、どこかで密接につながっていることが容易に予想される。カッシーラーの 1930 年の講演ではパノフスキーも臨席し発言もしている。A・ヴァールブルクの死とともに延期された美学芸術学国際会議において空間という統一テーマを掲げたのは、おそらくは、カッシーラーとパノフスキー両者であろう、いや少なくとも部分的には関与していたであろう、と推測される。

上述の理論的・発展史的問題の研究と並行して、カッシーラーと芸術という問題に関する先行研究を収集し、集約に努めた。また、2012 年 3 月には、精力的に活動している国内の研究者の三氏（森淑仁、馬原潤二、齊藤伸[敬称略]）を沖縄に招いてコロキウムを開催してディスカッションを行い、カッシーラーの哲学についての国内の研究の拡大・進展を図った。

４．研究成果

上掲の（１）に関連する研究として、2011 年の 3 月に「遠近法と象徴形式―カッシーラー哲学と芸術空間―」と題する論文をまとめた。

パノフスキーが「象徴形式としての遠近法」(1925) において行った冒頭の議論は、遠近法は単に客観的に唯一妥当する外界を事後的に映し出すだけのものではないという主張であり、カッシーラーが常々行っている認識論上の模写説に対する批判と軌を一にしていることが指摘できる。ルネサンスの遠近法とは異なる原理に基づく、消失軸を有した古代の遠近法が存在していたことをパノフスキーが主張し、可能な遠近法は一つだけではないことを示そうとしているのも、象徴形式が複数あり、科学的認識はそのなかの一つであることを主張するカッシーラーと歩調を合わせたものであるということができる。

カッシーラーは理論的な著作でパノフスキーの議論を直接敷衍することはないものの、『個と宇宙』(1927) においてルネサンスの思想が古代から自立する過程を傍証するものとして紹介している。また、「形式と技術」においてパノフスキーの概念規定をそのまま受け入れる形で用いている。そうした状況から見えてくるのは、一方では造形芸術においてルネサンス的な遠近法を用意した新たな空間観が、近代的な理論的認識の生成過程においても一定の役割を果たしていたということである。『象徴形式の哲学』第二巻においてカッシーラー自身が「神話的意識の弁証法」という規定のもとで主張しているように、理論的認識も芸術も、神話的な意識の内部に発して、そこから次第に自らを解き放つに至る。その過程においてある種の交錯・協働が存在しているということになる。

また、2010 年 7 月に開催された第 82 回九州藝術学会にて、問題全体を俯瞰的に整理するための報告を行った。この報告においては、芸術という象徴形式の成立を見てゆくのではなくて、広義の感性論という観点からカッシーラーの 1920 年代の思想的展開を追うことを試みた。表情機能 (Ausdrucksfunktion) を含めた象徴機能の分析を一つの到達点と見なし、それに至るまでの前段階において、同趣旨のことをどのような形で述べているのかを問題にした。

また、認識批判という見地から、科学的認識には収まりきれない、神話、言語、芸術などの文化領域へと考察の対象を拡張することで開始した『象徴形式の哲学』の試みは、芸術についての体系的な叙述を欠いているにしても、上級認識論に対する下級認識論として成立を見た美学の試みと、ある面では大きく触れ合うことができるであろう。神話的な意識において意味内容と分かちがたく溶け込んだ感性的なものの在り処を、概念や抽象を通じて乗り越える言語や科学的認識に対して、あくまで担保し続けるのが芸術の役割の一つと見なされるであろう、という考察を述べた。

さらに、同年 8 月北京で開催された第 18 回国際美学会議において、上掲の（２）に関連する報告を行った。カッシーラーの空間論、とりわけ美的空間についての議論は、講演のあとの共同討議において、様式概念の根拠を用意するものとして擁護されており、後に彼が『人文科学の論理』(1942) において展開する様式概念の検討へと展開するものであると考えられる。

そうした解釈を踏まえたうえで、様式概念が、カッシーラーの多元論的主張に基づいていることを指摘した。様式概念は、芸術における制作のアプローチの多様性を保証するうえで欠かせないものであること、多くの様式を擁し、かつそれらのあいだを自由に往還することが、我々の認識を多様に向かって開かれていることの証左であるという趣旨のことを述べた。ある芸術ジャンルなり領域なりが単一の様式のみの妥当性を主張しその様式で覆い尽くされた場合、我々の認識は深刻な拘束を受けることになるであろう。

口頭発表という形で報告した研究成果については、いずれも、課題を残す形にとどま

っていたものなので、次号の沖縄県立芸術大学紀要にて論文の形で、あらためて総括的な報告を取りまとめる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①喜屋武盛也「遠近法と象徴形式-カッシーラー哲学と芸術空間-」沖縄県立芸術大学紀要 19, 2011-03-31, 1-9,（査読なし）
http://ci.nii.ac.jp/naid/110008600832

〔学会発表〕（計２件）
①喜屋武盛也“Aesthetic Space and Style”：The 18th International Congress of Aesthetics, in Beijing University (Beijing, China), August 12th 2010. （第18回国際美学会議、2010.8、北京）

②喜屋武盛也「〈象徴形式の哲学〉の形成と感性論」第 82 回九州藝術学会、於御花史料館（柳川市）、2010 年 7 月 3 日

６．研究組織
(1)研究代表者
喜屋武　盛也（KIYATAKE MORIYA）
沖縄県立芸術大学・美術工芸学部・准教授
研究者番号：10345241

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：